病院で働く介護職の役割とは

患者の入院した「一番の目的」を支えるために

福岡・介護老人保健施設くろさき苑　宮川　昇

はじめに

高齢化が進むわが国にとって、介護の問題は最も重要なものの一つとして連日マスコミにも取り上げられている。

当法人親仁会においても、介護職の職員数が看護職に次ぐものとなり、大きな役割と責任をもつ職能団体になっている。介護職員の活躍の場も介護保険施設だけではなく、病院や相談支援業務など多岐にわたっている。

全日本民医連の場合、医療機関が主体となっている特色上、病院での介護を実践している介護職が、他の団体・法人と比較しても数多く存在している。治療の場ともいえる病院において、介護職として何を行っていくべきなのか？　役割は何なのか？　当法人の介護職能委員会等で出された意見や悩みなどから考えていきたい。

職能委員会の設立

当法人の介護職の職能委員会である介護士委員会が立ちあげられたのは、今から８年前の2002年。ちょうどそのころは、療養病床の転換などがあり、多くの介護職が入職した時期であった。それまでは介護職のほとんどが法人内の老人保健施設で働いており、介護職＝施設勤務、つまり「病院での介護」は別世界の事柄だった。

それぞれの視点の違い

法人内で委員会を立ち上げ意見交換をしていくと、「私たちがやりたい介護はこのようなことではない。私たちは看護の助手でもお手伝いでもない！」という意見が聞かれ、実際に幾人もの介護士が退職していった。一方、看護師たちからは、「彼らが何をしたいと言っているのか？　何を求めているのかわからない…」という嘆きにも近い声が聞こえてきた。

もちろんこのようなことは、現在でも病院・施設などいたるところで、多少なりとも起こっていることだろう。

私は原因の一つとして、それぞれの職種による視点の違いがあるのではないかと思う。

例えば入浴の場面では、リハビリ職員は、障害レベルとそれに応じた介助方法、シャワーチェアーや入浴機器がその方に適しているかなどを、まず最初に考えるのではないだろうか（障害から考える）。看護職は、その人の疾患や入浴前後の体調はどうなのか？　皮膚状態はどうか？　負担がかからない入浴時間は…などを最初に考えるのではないだろうか（疾患から考える）。

では、介護職はどうだろう。この人は何度ぐらいのお湯の温度が好みで、入浴時間はこうで、どんな時間に（朝・夕・寝る前、汗をかいた仕事の後など）入浴したいのか？　入浴後は何をしたいのか？　等を最初に考えるのではないか（生活から考える）。もちろんこれは極端な言い方で、個人個人によって違う考えもあるだろうし、どの職種も様々な視点を持ち合わせながら、患者・利用者に向き合っていることだろう。しかしめざすところが一緒であろうとも、職種によって根本となる部分が違うということは、当然のこととしてそれぞれが理解していく必要があると思う。

介護士教育

介護士委員会では、法人内の介護職の業務整備

やマニュアル作成のほか、介護士教育に力を注いでいった。

新卒職員には入職時研修、新人研修（1年目、2年目)、中堅研修などを通して介護を行う上で必要な基礎知識から、介護における実践まで様々な内容を、ときには先輩介護士がチューターになり教育を行っている。それ以外にも他職場研修(法人内）や他法人研修などを行ったが、研修を通して行っていった大きなテーマは「介護の専門性を考える」ことだった。

患者から教えてもらったこと…

私たちの現場には認知症の方が多くおられる。認知症の方は「介護」とは何なのか？　私たちには何が足りなくて、何をしていかなくてはならないのか？　など、大きな「テーマ」を与えてくれる。

病院に入院していた認知症を持っているAさんは、リハビリに行きたがらず、また、行ったとしても必要な起立訓練などまったくと言っていいほど興味を示さなかった。

あるとき、若い女性介護スタッフが患者を集めて料理教室を開くことにした。

手が震えて字もうまく書けない患者たちに包丁を握らせることに最初は不安も強かったが、そこではいつもと違うAさんの姿があった。10分、20分と立った状態で、野菜のかつらむきなど手慣れた手つきで行っていく。逆にスタッフの方が包丁で手をケガするありさまだった。いつの間にか患者が先生となり、若いスタッフにいろいろ教えている。普段の病院の中にある日常風景が逆転した場面である。

しかしこれが病院以外では、ごく当たり前の日常風景であり、この姿こそ本当の患者の姿なのではないのか…。

チームアプローチ

「患者にとって病院に入院する一番の目的は？」このような質問をすると、「疾病や疾患の治療を行うこと」という答えが多く返ってくると思う。確かにそれは間違いではないが、本当の目的は、「その人らしい生活、その人にとってよりよい生活を継続していくこと」であり、そのための手段として「疾病や疾患の治療」があるのではないかと私自身は思う。

介護スタッフがお化粧のお手伝い

患者一人ひとりを支えていくためには、様々な視点が必要になってくる。だからこそ多くの専門職がかかわっていくチームアプローチが重要であり、その中でも介護職の役割も大きなものとなっている。

民医連においての介護とは

病院には多数の高齢者の方が入院している。高齢者の中には認知症の方が多く、特に介護職が働いているような慢性期、回復期の病棟の入院患者の中でも多くの割合を占めている。

その患者の方々を介護していくには、その人らしさの追求、その人たちの生活歴や家族背景、好みや性格などを知ることが重要になってくる。このことは、くしくも民医連が永年実践してきた、疾病だけではなく、その背景にある労働や生活から見ていく視点。その人本人を生活丸ごととらえる民医連の、特に優れた視点と共通していることである。

現在、全日本民医連では「民医連介護・福祉の理念（案)」が提起されている。たとえそれが医療現場であっても、その実践こそが「病院で働く介護職の役割」にも繋(つな)がり、患者が入院した「一番の目的」を支えていくことになるのだろう。